

## 玉井忠純氏による土岐健治著『[改訂新版] 新約聖書ギリシア語初歩』(教文館、1999年) への批判

青 野 太 潮

玉井忠純氏は、1938年生まれで、東京大学法学部を卒業後、1998年に退職するまで三井信託銀行に勤務した。官司の息子でありながら、大学在学中から文語訳聖書に親しんでいたが、福岡勤務中の1980年に、私が協力牧師をしている平尾バプテスト教会でバプテスマを受けた。現在は津田沼バプテスト教会の会員である。著書に『パウロ様への恋文』(文芸社、2000年)があるが、その経歴が示すとおり、玉井氏はギリシア語の専門家ではない。しかし、大いなる熱意をもって古典ギリシア語をまず学び、その上で新約聖書のギリシア語の原典を丹念に読んでいる。毎夏信州伊那谷において私青野が講師として招かれて開催されている新約聖書原典講読塾(主催者はそれを青野聖書塾などと呼んでいるが)の、熱心な参加者でもある。そのような学びの過程で、玉井氏は土岐健治氏の『[改訂新版] 新約聖書ギリシア語初歩』(教文館、1999年)からも学び、そこから以下のような批判文を認め、さらに、極めて独自の「原初的ギリシア語動詞に関する推論」をも展開した。玉井氏の文章を私青野が逐一監修したので、文責は私にも等しくあるが、「素人」の玉井氏の述べる内容には傾聴すべきものが多く含まれていると思うので、以下に私の責任で本稿を本『神学論集』に掲載することにした。もちろんこのような批判は、本来、日本語の、そしてまた欧米語の他の多くのギリシア語文法書との折衝の中で比較検討しつつ展開されるべきであることは言うまでもないが(もっとも玉井氏は、すでに大貫隆著『新約聖書ギリシア語入門』(岩

波書店、2004年)への批判文をも書き上げている)、しかしこれ自体でも大きな意味をもっていると思われる。議論の深化へのきっかけの提供となり得るならば、それはわれわれの喜びとするところである。

---

---

土岐健治著『[改訂新版] 新約聖書ギリシア語初歩』  
(教文館、1999年)について

玉井忠純

偶然にも、古川晴風著『ギリシア語四週間』(大学書林、1957年初版、1991年第24版)(以下、「古川書」と省略)において先ず古典ギリシア語の文法を、次いで土岐健治著『[改訂新版]新約聖書ギリシア語初歩』(教文館、1999年)(以下、「本書」と省略)によってコイネー・ギリシア語の文法を独習するという経験をしたので、両書における説明を比較検討して、その相違点を挙げ、併せて若干の所感を述べることにしたい。

なお、相違点のうち、文法自体の変化——たとえば古典文法における「両数」がコイネーではもはや用いられなくなっていることなど——に起因することがらや、用語の違いについては、原則としてふれないこととする。たとえば、本書§197の「希求法の用法」の「②可能性」を、古川書(154頁)は「想像」と表現していることとか、本書§215の「② ean (=ei+an) +接続法(否定は mē)」についての「(a) 未来における実現を期待している条件文。帰結文は直説法未来が普通。」との記述、および「(b) 現在や未来にくり返される出来事の想定」との記述に対して、古川書(146、155~156頁)は「未来の単純な(実現の可能性の多い)仮定(主文は直説法未来又はそれに準ずるもの)」、および「現在の一般的仮定(主文は直説法現在又はそれに準ずるもの)」と説明していることなど、である。

〈本論〉に入る前に、誤植と思われる箇所を列挙しておきたい。

i 頁(はしがき)下から9行目

「後者の一部としての新約聖書をギリシア語」は、「新約聖書のギリシア語」。

24頁 7行目 右から2列目

ho archōn の与格としての archphonti の ph を削除して archonti とする。

27頁 10行目

(..... thygater) のあとの「§238参照」は、「§239参照」。

33頁 13行目

〈hygies(s)i(n) は、hygie(s)si(n) とする。つまり、語幹末の s が消えると考えるべきであろう。

54頁 下から7行目

右側欄の「単数」は「複数」。

59頁 1行目

「mente」は「pente」。

60頁 下から10行目

左側欄の「ekklēaia」は「ekklēsia」。

65頁 4行目

右側欄の「sperya」は「sperma」。

同頁 下から6行目

「didakalon」は「didaskalon」。

74頁 下から8行目

Galilias の冒頭の大文字 G は、本書5頁に印刷されている大文字と同じものを採用すべきであろう。

75頁 3行目

「あなたがと共に」は「あなたがたと共に」。

77頁 13行目 右から2列目

「tithe-asi(n)」の ti と si との上のアクセント符号を削除する。

89頁 下から8行目

「§ 251」は「§ 250」。

90頁 7行目

「themenos」は「bemenos」、「thesthai」は「besthai」。

91頁 13行目

「ban-」は「ba(n)-」。(本書217頁を参照。)

122頁 2行目

「donaton」は「dynaton」。

129頁 下から5行目

「peosenegkon」は「prosenegkon」。

161頁 下から3行目

「排列する」は「配列する」。

164頁 5行目

「sechō」は「sech-sō」となるべきであろう。

167頁 3行目

「20<sub>26</sub>」は「20<sub>28</sub>」。

175頁 13行目

「tasauta」は「tosauta」。

表現上の小さな工夫の提案として、

§ 40註2 (30頁)の「.....pater へつないでいる。」のあとに「(§ 258③参照)」を加える。

§ 128 (71頁下から7行目)に「....., amphi, peri, pro は省音を行わず, ek が加音(必ず母音)の前で ex となることはXIV章 (§ 108.1)に述べた通りである。」とあるが、前者についてはXIV章では何も述べられていないので、「.....省音を行わない, ek が加音.....」と改めたほうがよいのではないか。

## 〈本論〉

説明の相違点などについて。

### I. 名詞および形容詞関係

#### 1. 格の配列ならびに呼格の扱いについて

① 本書は、その変化表において、格を主、属、与および対格の順に配列し、呼格は、呼格形がある場合に限りこれを対格の次に置くものとしている。この場合、一部の変化表では、複数主格欄を「主・呼」または「主呼」と改めている。しかし、そもそも呼格のない冠詞や代名詞(二人称は例外)、あるいはすでにその姿を消してしまっている奪格や地・具格とは違って、名詞および形容詞には相当量の呼格形が現存しているし、主・呼格同形の語においても、男性単数に固有の呼格形を有しているところの「第一第二変化形容詞」(本書§ 25)との対比において、とくにその旨表示する必要の感じられる「二語尾の第二変化形容詞」(本書§ 26)のようなものもある。本書では主・呼格同形を前提とした説明法が採られているためであろうが、§ 26でも特段の説明はない。それゆえに、「主呼」等の〈まとめ表示〉をも活用しつつ、呼格もまた常時表示されることになれば、少なくとも学習者にとっては、より理解しやすいものになることであろう。

② 呼格の表示位置としては、本書「格の用法」(166-176頁)中の§ 258「注意」や§ 265等に述べられていること(本書の呼格の扱いは、そこで述べられている点、就中「真の意味での格ではない」とか「弱い格である」という点に特に注目したところから出たものであろうか)、および主・呼格同形の場合の〈まとめ表示〉との整合性を勘案して、主格の次に置くのが適当ではないかと私には思われる。

③ また、対格の表示位置についても、次の二点からして、主格との親密な関係が認められるので、主、呼格の次に置くのが適当ではないかと私には思われる。

A. 中性(単、複数とも)においては、ならびにコイナーでは既に用いられなくなってはいるが両数(三性とも)においては、主、呼、対格は同形となる。

B. 第三変化 es 語幹等で、複数対格が複数主・呼格と同形になる場合がある(本書 §38「注意(2)」、§39「注意(3)」参照)。

(因みに古川書では、格は主、呼、対、属、与の順に配列するのを原則とし、複数など一律に主・呼格同形となる場合のみ、「主、呼」とまとめて表示している。)

④ なお、呼格に関する説明については、さらに次の二点にふれておきたい。

A. 本書 §265の②は、「呼格に主格の冠詞がつけられることが多い(新約中約60回)」と説明して、二例を挙げているが、明白な呼格形に冠詞がつけられているのならともかく、そうではない例示のような場合については、むしろ §258の「③呼びかけの主格」そのものと解すべきではなからうか。

B. 本書 §239. iiiの「第三変化名詞補説」としての「流音幹」についての説明においては、「②古典ギリシア語の原則では、鋭調語で、単数主格語尾が -s でないものは、単数呼格=主格。」と記されている。しかし古川書(141頁)によれば、一部例外はあるものの、流音幹第三変化では、主、呼格の -s は用いられず、母音を代替延長する(ただし、呼格については *ultima* にアクセントがある場合に限る)のが原則であり、また鋭調語であっても、呼格アクセントが前に移動する語においては、母音延長がないために、単数呼格≠主格となる(例: *pater* ≠ *patēr* 等)。従って本書の説明が妥当しない場合があることになる。

## 2. 第一変化名詞について

本書 §17~19、§230~233の説明を総合すると、次のようになると思われる。

A. 第一変化名詞の語には、以下の二つの語群がある。すなわち、単数語尾に *ā* (前が *e*, *i* または *r* 以外の時には *ē*) — 主格 *ā* (男性は *ās*)、属格 *ās*

(男性は *ou*)、与格 *ā*、対格 *ān*、呼格 *ā* (男性で、単数主格が *-tēs* に終る語と、民族名を表わす *-ēs* に終る語とでは短い *a*) — が表われる語群(女性または男性)と、単数主、対、呼格に限り長い *ā* ではなく短い *a* (属、与格は長い *ā* で、前が *e*, *i* または *r* 以外の時には *ē*、更に、前が *r* の時にも多くの語で *ē*) となる語群(女性のみ)とがある。[因みに、古川書(40、50、62頁)は、上記の *ā* と *ē* との関係については、第一変化の基準語尾を *ā* ではなく *ē* とし、*e*, *i* または *r* の後ではすべての *ē* が *ā* となる(古典では *a* 型の *r* の場合もすべて *ā* となった)旨説明している。]

B. 女性の語尾 *a* の長短は、単数主格のアクセントの位置によってほぼ判別しうる (§232)。

しかし、上記 B. に関する本書 §232の説明は、「アクセントの法則」(本書 §223~227)の裏返しでしかない。古川書(50、116、120頁)の説明によれば、*a* 型の第一変化は、名詞では女性接尾辞 *ja* (*j* は英語の *y* と同じ子音的な *i* を表わす)に由来するもの等に限って見られ、他は第一第三変化形容詞の女性および能動分詞の女性(いずれも *ja* 由来)にのみ見られるものであるから、もしも本書のような判別法に言及するのなら、これらのことを説明する方が相応しかったのではなからうか。

## II. 代名詞関係

### 1. 三人称代名詞 *autos* について

本書 §74、75は、*autos* を何の留保もなく「三人称代名詞」とし、その別用法に対して「強意代名詞」の名称があると説明している。しかし古川書(75、81頁)は、*autos* は本来「強意代名詞」であり、「三人称代名詞」には、もはやその本来の用途に用いられることはなくなっているとはいえ別の形が存在しており、*autos* をこれに当てるのは飽くまでも代用であると説明している。本書を先に学んだ者が古典文法へと進む場合に、上記の説明が何らかの障り

とならないか心配される。

## 2. 再帰代名詞複数について

本書 § 76では、何の留保もなく *heautōn* などが全人称に用いられるとされている。しかし古川書 (88頁) は、これを三人称にのみ用いるものとし、一、二人称には、固有の形がないため「人称代名詞+強意代名詞」をもって代用すると説明している。コイナーが *heautōn* 等を一、二人称にも用いるのは代用であろうと考えられるが、本書の説明には上記と同様の懸念を覚える。

## Ⅲ. 動詞関係

### 1. 現在 (直説法) の用法について

本書 § 130の「①継続, 進行, 習慣, 反復」の中の単なる「継続」と、「③過去に始まり現在なお継続している事柄」との間の違いが判然としないように私には思われる。「①継続」に該当する例文が示されていないので不確かではあるが、③が〈過去における始まり〉を意識するのに対し、①は〈これを特に意識することなく、単に現在継続しているという点にのみ注目する〉ということなのであろうか。なお、古川書にはこのことへの言及はない。

### 2. 分詞の示す時について

本書 § 177は、「分詞は.....原則として過去や現在といった時を示すことなく、各時称形は動作の様態の区別を示すものである」と説明しているが、「原則として」と断ったその理由を、次のように広く説明している。「しかし現在分詞は主として文章の主動詞と同時的な動作を (A), アオリスト分詞は主として文章の主動詞に先行する動作を示すことが多い (B). ただし.....(改行) これに対して未来分詞は必ず主動詞より後の動作を示し (G), 無冠詞の場合はすべて目的を示している (H). (改行) 完了分詞は.....こともある (J)」。そして本書は、上記の説明に加えて、「総じて分詞

の意味するところは文脈から慎重に判断されなければならないが、その際に.....時間的關係から言えば A~J を判断の目安とすべきことを示したのである」と言う。

しかし、例文をも参照しつつ上記の説明を注意深く読むと、〈未来分詞を別にすれば、分詞そのものが文章の主動詞との時間的前後関係を確固たるものとして示すことはなく、専ら動作の様態の区別を示すのみである。ただ、敢えて分詞と主動詞との間の時間的前後関係を問題にするなら、多くの場合 A~F, I または J (すなわち、考えうるほぼすべての場合) のいずれかに該当することになる〉ということだと分かる。つまり、上に引用した「時」を示さないという「原則」が妥当しないのは、〈未来分詞が必ず文章の主動詞より後の動作 (目的等) を示す〉ということだけになってしまう、ということである。実際、以上の事柄について、古川書 (124頁) は、ただ単に次のように説明するのみである。「分詞の時称の違いは時の相違を表わすものではなく、動作態の相違を表わす。即ち.....。ただし未来形のみは時の意味をふくみ、主文の動詞より未来のことを示す」。もっとも古川書は、「またアオリスト分詞も主文の動詞に対する過去を表わすこともある」と加えているが、この言及は、蛇足であろうと思う。

### 3. 希求法について

本書 § 196の「注意: (1)」は、「希求法は..... (o)i, (a)i, iē によって特徴づけられる (法接尾辞 i/iē).」と説明する。しかし、このうち iē については、〈その ē 部分は受動態接尾辞 thē に属するものであり、希求法接尾辞は th と ē との間に挿入された (e)i である〉と考える方が、次の理由からして、妥当なのではなかろうかと私には思われる。

すなわち、この ē は、古典ギリシア語では、古川書 (153~154頁) が「..... -ē の入ったものと入らぬものとの両形があるが、単数では -ē の入った方、両数及び複数では入らぬ方が普通に用いられる」と説明しているところの特徴をもって、受動態アオリストのみならず融合動詞や *mi* 動詞などの希求法にも表われるので、〈それならば、この ē については、それらと

共通の場面でその意義を考察するのが適切であろうから、希求法接尾辞からは切り離されるべきであろうと考えられるからである。また、受動態接尾辞についても、*theiē* から *iē* を取り除くと *the* の形が残ることになるが、受動態接尾辞は原則として *thē* または *th* (接続法で用いられる。また上記の *-ē* の入らぬ方の場合もこれに該当しよう) であって、*the* の形は命令法三人称複数に例外的に表われるだけであるとするのが妥当であると考えられるからである。

#### 4. 接続法について

本書 § 202 「接続法の用法(1)独立文において……①勸奨 (一人称で)」の中に「例外として二人称で *apokrihēte moi.*」との用例が示されているが、*thē* の *ē* の上に曲アクセントがついておれば接続法であるが、*kri* の *i* の上に鋭アクセントがついているのだから (例として引用されているマルコ 11・29、30のアクセントも後者である!)、本書 § 278の表が正しく指示しているように、これは接続法ではなく命令法なのではなかろうか。

本書 § 203 「接続法の用法(2)従属文において」に「②接続法は……普遍的・反復的条件を表現することがある」との説明があり、それは § 215の「② (b) 現在や未来にくり返される出来事の想定」を指しているかのように読めるのだが、しかし例文としては、同じ § 215の「② (a) 未来における実現を期待している条件文、帰結文は直説法未来が普通」に該当するか、少なくともそれに近いと思われる例のみが示されている。もしかしたら、上に引用した「②接続法は……普遍的・反復的条件を表現することがある」との文中の「普遍的……」の前に入るべき「未来における実現を期待している条件または」との文章が脱落したのであろうか。

#### ・その他

##### 1. 積義上の異見

本書 § 246 「原級の特異な用例 *i.* 最上級として」の例文としてのヨハネ 2・10の *pas anthropōs prōton ton kalon oionon tithēsin.* については、「最上等

のぶどう酒」と読まねばならぬまでの必然性は感じられない。論理を突き詰めればそういうことになるとしても、〈ことば〉としては、せいぜい〈良い方の〉程度に止めておく方が穏当なのではなかろうか。現に口語訳、新共同訳、そして岩波訳も、みな最上級には訳していない。

本書 § 259 「③主語的属格と目的語的属格」の例文：*ho logos tou staurou* は、目的語的にとって「十字架をのべ伝えることば」と訳されているが、ネストレ・アーラント 27版や UBS 4 版の第一コリント 1・18が採用している *ho logos ho tou staurou* と同義に読んで、〈十字架の出来事を通して啓示されていることがらを語る言葉〉と読みたいと思う。仮に中間の定冠詞のないものが本来の文であったとしても、パウロが宣教するのは、〈十字架につけられてしまっているキリスト〉、すなわち、〈その十字架に凝縮され、そこにおいて貫徹されているキリスト・イエスの一貫した生き様のすべて〉であって、アオリスト的ニュアンスにおける平板な「十字架の出来事」ではなく、ましてや単なる「十字架」でも勿論ないのだからである。

#### 2. 誤植と思われる事項等について

本書は「*hiēmi*」のイオタをすべて長音に読んでいる (§ 255 *aphiēmi*、§ 256 *syniēmi*、201頁の右側欄、および 218頁の *hiēmi*)。古典ギリシア語でも、合成語の *aphiēmi* は、短く読む場合と長く読む場合とがほぼ拮抗しており、また *hiēmi* 自体でも稀に長く読まれることがあったとされているので、これらをすべて誤植と看做すのは大いに躊躇される場所であるが、しかし、長音に読むのは古典では時量的加音の時のみであること、〈*ign*〉が〈*in*〉と変化した *ginomai* の類の他にはイオタを長音に読む例を見ないことから、敢えて誤植であろうと推定した。

#### 〈付録〉

##### 〈ギリシア語雑感〉

以下は土岐文法書批判ではないが、古川書を学ぶ過程で芽生え、更に本書

を学ぶ間に、おぼろげながらもその姿が認められるところまで何とか生長した、ギリシア語についての感想を、以下に記したい。

## 原初的ギリシア語動詞に関する推論

### 1. 神々の意思に基づく動作の時代

① 原初的な話し手が〈ことば〉を切実に求め、しかもそれが頻繁に起つたであろうと想像される場面——ことばの温床——は、おそらく、〈聞き手によってなされるべき動作〉について、話し手が、その動作によってもたらされる成果を切実に期待している場面であり、その時話し手は、これを当該聞き手に促す必要に迫られる、そのような場面だったのであるから、この〈聞き手の動作を促すためのことば〉が、最初のことばとして生じたものと推測される。それは、場面によっては物の名前をただ唱えるだけという方法によっても表現しえたであろうが、より全般的な、動作それ自体を表わす動詞表現としては、次のような特徴を持った表現だったのである、と推測される。

A. 〈聞き手の動作（二人称の動作）を促すためのことば〉であるから、それは、〈懇願をも含む広義の命令法二人称〉の表現であった。

B. 話し手が期待しているのは〈動作そのもの〉ではなく、むしろ〈動作の成果（結果として在る現在の状態）〉であるから、それは、〈完了〉時称（ただし語尾は、下記②の用法の展開の結果、後代の文法が「副時称」と呼ぶこととなった語尾）の表現であった。

C. 原初的な話し手にとっては、すべてのことは神々の許諾ないし取り計らいの下に実現するものであり、人間の動作もまたその例外ではありえないゆえ、それは、神々に対する請願のニュアンスを含んだ——神々を〈内心の（隠れた）聞き手〉とする——〈原初的な中動態〉の表現であった。

D. 意識の重点が〈顕在の聞き手（人）〉から〈内心の・隠れた聞き手（神々）〉に移るとき、〈三人称の動作〉から、更には〈一人称の動作〉まで、表現することが可能となり、それらの表現が派生する。この場合、〈顕在の聞き手（人）〉の方は、話し手と共に神々への請願に与った者として、当該

動作にも何らかの形で参加することになったであろうと想像される。

② 上記①は、動作の現場における表現であるが、次の段階として話し手がその必要に迫られたのは、その現場から離れた場所にいる、全く別の聞き手に、現場において生じた事態を報告するための表現だった、そしてそれは、次のような特徴を持っていたであろう、と推測される。

A. 報告であるから、後代の文法に照らして言えば、それは〈直説法〉の表現であり、またそれは、それが語られる時点では既に過去の事柄となっている出来事を表現するものであるから、〈過去完了〉時称の表現であった。

B. しかし用いられた〈ことば〉自体としては、上記①と全く同じく〈ことば〉が、加音も畳音も未だ加えられることのないまま、そしておそらく、少なくともその最初の段階では人称変換すらなされないままに、あたかも直接話法によるかのように、そのまま用いられたのでありと想像される。

C. また、話し手が上記①の動作の成果を未だ見ていない段階で報告する場面も想定されるが、その場合には、上記A. の〈過去完了〉の表現では具合が悪いため、やがて、当該動作が継続中であつたと話し手が知っている場合に対しては〈未完了過去〉時称の表現が派生し、継続されていたかどうかすら知らない場合に対しては〈アオリスト〉時称の表現が派生したものと推測される。

### 2. 人間の意思に基づく動作の時代

① 過渡的に、先ず、話し手の主体性が強く意識されるようになって、〈広義の命令法〉はその〈一人称〉を失い、代替的に〈中動態希求法〉の表現が発生、更に、命令法にも、完了以外の時称による表現が波及して行く一方、同じ頃に、話し手の〈認識〉そのものを表現する〈本時称の中動態直説法〉表現が発生したものと想像される。加音や畳音が工夫されたのも、もしかしたら、これらの変化の過程においてだったかも知れない。

② 次いで、〈人間の動作は動作者の意思に基づく〉との観念の発達に応じ、〈能動態〉表現が発生、続いて〈受動態〉表現の派生と〈原初的な中動

態〉の変質（その兆しは〈本時称の中動態直説法〉の中に既に見られる）とがあり、最後に〈接続法〉表現が発生するという経過を辿ったのであろうと推測される。

3. 古代ギリシア語動詞の人称語尾には、以上の経過の痕跡が、微かにではあるが、残されていると認められる。いくつかの例を挙げれば、次のとおりである。

- (1) 中動態命令法現在完了と同直説法副時称との関連では、二人称語尾 *-so*、*-stho*、*-sthe* が一致している。三人称語尾では、単数と複数とで *-sth-* が *-t-* と変化しているほか、母音も三数を通じて若干変化している。しかし近縁性は認められる。
- (2) 中動態直説法副時称と同本時称との関連では、両数二人称、複数一人称、同二人称の語尾 *-stho*、*-metha*、*-sthe* が一致しており、他の語尾もよく似ている。
- (3) 中動態希求法の語尾は、すべて同直説法副時称の語尾と一致している。能動態においても略同様の一致が見られるが、単数と三人称複数とにあっては一様でない。
- (4) 中動態の語尾と能動態の語尾との関係では、命令法で二人称単数以外において、その他の法で両数二人称、同三人称および複数二人称において、前者の *-sth-* が *-t-* と変化して後者になっているらしい、ということが推察される。しかし、能動態の語尾自体が一様でないこともあり、それ以上の関連は確認しがたい。
- (5) 接続法の語尾は、中動態、能動態ともすべて直説法現在のそれぞれの語尾と一致している。